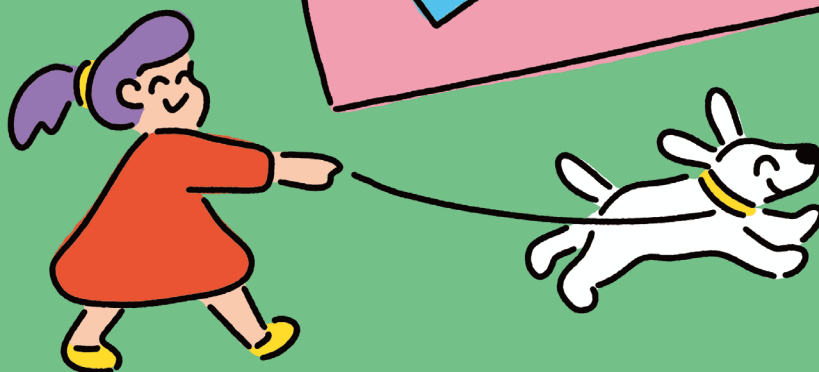


二子玉川から見つめる、わたしの「まち」



いいまちって何だろう。
近所で見かけるあの人、あの店、あの景色。
都市の魅力と豊かな自然、
たくさんさんの思いが交差する二子玉川から、
みんなの「まち」の話を聞きました。



FUTAKO TAMAGAWA
rise

FUTAKO STORIES



今回のタマリバースvol.15
『パラライズ〜炒(おど)れ、ひと粒のプライドをかけて〜』は、
10月10日(土)・11日(日)に開催されるよ！
異なる要素が交わりながら発展してきた
二子玉川のまちを
「チャーハン」に見立ててるんだって！

アートを混ぜ、人を炒め、まちをつくる

 澤田：2011年、“クリエイティブシティ”を掲げた二子玉川ライズの開業イベントで、芸術的感覚、つまりアートが肝になるだろうとスタートしたのが「タマリバース」です。「近くに多摩美術大学があるのに関わらないわけにはいかない」とプロジェクトを一緒に進めることになりました。

 加納：私たちににとって、上演芸術を創作・研究・発信する場として、パブリックスペースで演劇を行うことには大きな意味がありました。演劇は観客がいて初めて成立するもの。古代ギリシャの劇場は野外でしたし、日本でも“芝居”と書くように、舞台は本来パブリックなものでもあるんです。学生たちにとって、キャンパスの外に出て第三者の視線に触れる機会は、またとない経験でした。

 澤田：ただ、2011年は東日本大震災があり、二子玉川ライズの開業自体が延期になったんです。イベントに向けた準備で近隣の子どもたちとワークショップでつくっていたアートもあったので、それを使わないのはもったいない。そこで5月の連休に向けた企画として、タマリバースへと繋がっていきました。

 加納：震災後、初めて笑顔を取り戻せたのがタマリバースだった、という感覚が私にはあります。それは演劇を困んでいたオーディエンスも同じだったんじゃないでしょうか。アートをまちのイベントとして考える、またとないタイミングだったと思います。最初はどうやって通りすがりの人々を立ち止まらせるかを考えました。最大30分という尺から逆算し、従来のセリフありきの演劇ではなく、この場所だからこそアウトプットを考えていった。衣装もそう。聴覚より視覚に訴えることで、まず街なかで興味を持ってもらうようにしたんです。第三者からの視線に触れることを私は「外面(ソトヅラ)効果」と呼んでいるのですが、オフキャンパスという舞台に参加すると、学生たちが勝手に多摩美を背負っているかのように輝きを増します。



澤田裕二さん

空間メディアプロデューサー

1957年、東京生まれ。明治大学建築学科卒。博覧会プロデューサー、空間メディアプロデューサーとして活躍し、UG WORK合同会社の代表を務める。2011年より、二子玉川ライズとのプロジェクト「タマリバース」に参画。多摩美術大学と連携し、多角的な視点でまちとアートの距離を縮めている。タマリバネームは「さわじい」。



オススメの本は？
今村翔吾
『じんかん』

「人間」という文字を「じんかん」と読むのですが、戦国時代に「三悪」として知られた武将、松永久秀を主人公にしている作品です。織田信長に唯一、「自分を裏切っても最後まで許す」と言わせた人物です。



 澤田：演目は毎年違いますが、この場所で発想して、ここで作るからこそ、二子玉川というまちの過去と未来、二子玉川ライズという場所の価値を表現し、感じていただくようにしています。嬉しいことにリピーターも多く、かつてタマリバースを観ていた子どもたちが、やがて多摩美に入学してくるようにもなりましたし、回を重ねるごとに成長したのはタマリバースだけではなく、オーディエンスも一緒でした。

 加納：とは言え、最初から今のような授業だったわけではありません。我々プロチームが何をやるかを居酒屋でしゃべり倒して、つくりながらトライ&エラーを重ねた。そのなかで「学生たちに預けるとするなら、何が必要なのか」というノウハウを蓄積していったんです。

 澤田：学生はプロではありませんから、お客さんの足を止めるハードルはそれなりに高い。面白くないものを提供すれば、多摩美にとっても良くない。だから、はじめの3年間は加納先生が企画を考え、松田さんがコーディネートを加え、学生たちが自分でつくり出せる土台をつくっていきました。

 松田：毎年春先に新しいカンパニーができて、秋には本番を迎える。反省を踏まえて「来年はこうしよう」と話しても、世代によって学生の性質が変わるので、授業としてはちっとも楽にならないんですよ(笑)。でも、ディレクションはしているものの、あらゆるクリエイションのアイデアを否定せず、我々としては「経緯を語る伴奏者」として関わっています。

 澤田：私たちは、まちの関係者を毎年ひとりずつでも増やすようにしています。神社の神主さんにお祓いをしてもらったり、保育園や地域メディアの方に授業へ来てもらったり。観客の8割はショッピングセンターのお客さんですが、まちの仕事だと思うと、それも足し算なんです。そうやって作品がまちから離れてしまわないように、15年かけて少しずつ関係値をつくってきました。

 松田：タマリバースは、垣根を取り払っているところが面白いんですよ。演者と観客という一方通行ではなく、その場に居合わせた人同士が、限られた時間だけでも一体になれる。二子玉川は、さまざまなものが渾然一体となって美味しくなる、“炒飯”みたいなまちです。何かひとつが突出していたとしても、このグルーヴ感は出せない。アートも、人も、学生も、住民も、ショッピングセンターも溶け合うんじゃないくて、パラバラと個性を持ったまま混ぜり合うことでまちになる。なので、タマリバースを通じて、これから二子玉川を炒飯の聖地にしたいですね。

 澤田：タマリバースは、そういう関係値の上に成り立っています。一人ひとりが自分事としてまちに関わる意識を持てれば、きっと一体になれる。15年間の積み重ねが新たな循環を生んでいますし、それがまちを育てるということなんだと思います。



加納豊美さん

1959年、岐阜市生まれ。多摩美術大学学長補佐・演劇舞踊デザイン学科教授。1997年、(有)アトリエDIG設立。東京演劇大学連盟代表理事。舞台衣裳家・衣服文化研究者。2011年より、二子玉川ライズとのプロジェクト「タマリバース」の舞台衣装を担当。タマリバネームは「とよBAR」。



オススメの本は？
夏目漱石
『夏目漱石全集』

ベタですが特に『吾輩は猫である』は大人になって読めば読むほど、明治政府への批評力がすごいなと感じる一冊です。漱石は明治生まれですが猫を主人公にした猫草子がたくさん存在していた、“猫に語らせる”という江戸文化の繋がりも見えて、面白いんです。



松田朋春さん

1964年、東京生まれ。プランナーであり、詩人。著書に『空気の日記』『わたしの犬退治』『エアリアル』など。多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科の非常勤講師を務める。2011年より、二子玉川ライズとのプロジェクト「タマリバース」のプロジェクトに参画。タマリバネームは「パンいち」(2024年、同名のパン屋を開業)。



オススメの本は？
松田朋春、ほか
『空気の日記』

書肆侃侃房(しょしかんかんぼう)という福岡の出版社から出ている詩集です。コロナ禍の2020年に23人の詩人と輪番制のリレー形式で綴った日記365日分をまとめた作品で、私も著者として参加。編集も担当させていただいたので、思い出深い作品です。

FUTAKO STORIES

コミュニケーションのハブとして 親子三代が繋ぐ、まちの金物店

 恒治:知り合いの間屋から「自分の代わりに金物店をやってくれないか」と声をかけられたことがきっかけで店を引き継いだのが1969年。以来、日本列島改造論やバブルによる大きな時代のうねりとともにぐり抜け、今日まで店を守ってきました。区画化が進み、次第に発展していく都市とともに建築関係の仕事も増え、忙しい時期は朝から晩まで休みなく働く生活が続きました。



二子玉川のまちも、この60年で大きく姿を変えましたよね。玉川高島屋の開業をはじめ、駅周辺の整備やマンションの増加など、人が集まり、暮らす環境は大きく変化しました。一方で、かつてまちに点在していた金物店や豆腐店などの個人店は、随分と少なくなりましたね。

 英治:私が父と一緒に働きはじめたのは19歳の頃。現場を駆け回る日々を経て、いまでは父から店を引き継ぐ立場になりました。父もまた次の世代のやり方を見守りながら、この店の未来を託そうとしています。そんな父がこの店の姿勢として創業より大切にしてきたのは、商品を売ることだけではない「会話」の部分なんです。

世の中、一見便利になったようで抜け落ちていることもたくさんある。そういったものに対してきめ細やかなサービスを心がけていくことは、これからより大切になっていくんだと思います。インターネットに載っていない、各々が抱えるグラデーションのある問題を解決していくためには、お客さんと直接会話することが一番なんですよ。かつての商店にあった、ちょっとした立ち話や近況を交わす時間。そんな人と人との接点を、これからもこのまちに残していけるように、私の息子世代のまちも見守っていけたらと思っています。

二子玉川ライズ・パースモール移転後の新しい試みとしては、私が伊豆ではじめて『まめったい農園』の野菜を、この店の入口に並べていることなんです。金物を買いに来る人だけでなく、野菜をきっかけに、これまで店に足を運ばなかった人も訪れるような場所にしていきたい。まちが変われば、商売のあり方も変わりますよね。そんな変化を受け入れながら、この場所で育まれてきた人の繋がりを次の世代へと渡していく。そんな新しい「まちのハブ」としてのあり方を模索しながら、父から息子、そして孫へと親子三代に渡し、これからもこのまちの金物店であり続けたいですね。

まちのなかに自然を、 暮らしのなかに薬膳を

大学時代に授業の一環で足を運んでいたのが二子玉川でした。当時はチーズケーキファクトリーによく通っていて、こじんまりとしたまちの印象もいまでは変化し、いつの間にか人が集まるまちになりましたよね。でも、川、緑、富士山が見える景色など、昔ながらの景色が共存している空気が好きでこのまちに住んでいます。実は世田谷区は、東京23区のなかで農地面積が第2位なんです。私は以前から「身土不二(※1)」を掲げ、世田谷産の野菜を使用した身体に良い料理を広めるため、28年間提携してきた減農薬農家さんの野菜を使用した料理教室を続けてきました。このまちは都会でありながら新鮮な野菜が豊富に手に入りますし、駅前の二子玉川ライズへ行けば、お肉やお魚はもちろん、スパイスなどの食材も簡単に手に入る。料理教室を開くには最適な場所なんです。

ここ数年は料理教室に「薬膳」の要素を取り入れています。それは私が12歳の時に体験した香港での出来事まで遡ります。当時、父の仕事で香港に住んでいた私は、生理痛でホテルのトイレにうずくまっていたところ、ホテルのトイレアテンダントが精油のようなものを首と背中に塗ってくれました。すると、魔法のように痛みが和らいだんです。養生を大切に、冷たい料理を避け、温かいお茶を飲む習慣が根づく香港での生活を通して、「薬膳は自分の身体をコントロールするための術になる」と感じ、中国の伝統医学を学ぶため、北京中医薬大学日本校で薬膳の資格を取得しました。

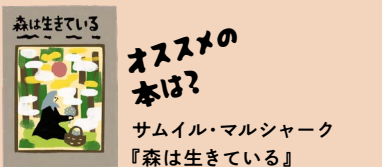
現在は和食や中華の基礎を追って学ぶ「守破離コース」、養生と料理の「薬膳講座」のふたつを展開。出汁の取り方、魚の扱い方といった土台から積み上げていきます。守破離は茶道や武道で受け継がれてきた言葉です。教室では、まず自分の体質を知り必要な食材の組み合わせを考えることで料理を愉しむ力を身につけていきます。「食べるということは生きることと直接リンクしている」。料理教室を続けるなかで実感したこの想いと、「人間も食材も同じ自然の一部」という中国哲学やアニミズム(※2)の思想が、薬膳を実践するなかで交わっていくことにもやりがいを感じています。

今年3月には三茶WORKからお声がけいただき、二子玉川ライズのイベントに初出店。幅広い客層に加え、若い方々が薬膳に興味をお持ちなことにも驚きました。なかでも人気だったのは、世田谷区ビジネスブランコンテストで優秀賞をいただいた薬膳茶『世田谷ひらく茶』。5種類のブレンドには世田谷産の食材を多く使用しており、巡りやすさや爽やかさを意識して柚子の皮、小豆、とうもろこしのヒゲをブレンドした『橘露茶』をはじめ、『陽溜茶』『開茶』『巡花茶』『月露茶』など、体質や症状に合わせた薬膳茶を選んでいただけます。薬膳料理は準備に少し手間がかかりますが、続けることが大切。まずは、お湯を注ぐだけで楽しめる薬膳茶から、日々の養生をはじめてみてください。



ミレイさん
二子玉川薬膳料理教室 MIREIN 講師

東京都出身。学生時代は中国哲学やアニミズムの概念などを学び、料理教室の講師を経て独立。1997年、自身の料理教室『MIREIN』を立ち上げる。近年は薬膳を軸に、「薬膳茶」世田谷ひらく茶で世田谷区ビジネスブランコンテスト優秀賞を獲得。そのほか、国際中医薬膳師・薬膳茶師の資格を持ち、区教育委員会・まちづくりセンター講師も務める。



小さい頃からずっと読み返している大好きな児童書は、マルシャークの戯曲。継母の家に住む少女が女王さまからのお触れによって森のなかにマツユキソウを探りに行き、12月の精霊に出会うお話です。この物語をヒントに、1月から12月までの薬膳スープのコースをつくろうと思っていますところ。

※1 身土不二
人間の体と、その人が暮らす土地は切り離せないという考え方。その土地で、その季節に採れたものを食べることが、体に最も合っているという意味合いを持つ
※2 アニミズム
自然界のあらゆるものに魂や精霊が宿るという思想。山、川、植物、動物、そして人間はすべてつながった存在であり、切り離すことのできない関係のなかに生きているという世界観を指す

永島恒治さん、英治さん

永島金物店
世田谷区玉川2-2-1
二子玉川ライズ・パースモール 1F
(二子玉川駅から徒歩3分)
営業日:月～土 7:30～18:30
定休日:日



普段はあまり本を読まないのですが、子どもの頃に毎月もらっていたのが『コロコロコミック』でした。漫画を読んだらベッドの下に敷き詰める。そんな動作を繰り返していたら、いつの間にかベッドが宙に浮いてしまっ



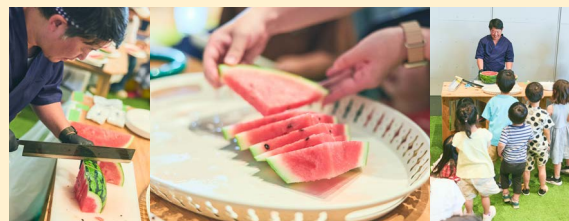
イベントレポート EVENT REPORT



二子玉川ライズ15周年の夏を彩る
『私の広場 -SETAGAYA REPUBLIC FES- ふたこの縁日』を
7月18日(土)～20日(月・祝)に開催。
二子玉川ライズ スタジオ&ホールで、
夏らしいマーケットやクラフトアイスバー、
音楽ライブが行われ、大人も子どもも思い思いに
夏を楽しむ3日間となりました。

スイカ割り&スイカ解体ショー

ぐるぐるバットとスイカに見立てたビーチボール、
威勢のいい声とともに会場が沸いた大人気企画。
大きな本物のスイカに包丁が入る瞬間は圧巻！
みんなでスイカを分け合い、頬張る姿も印象的でした。



サンダルづくりワークショップ

陶芸やまねき猫の絵付けとあわせて登場した、
縁日ならではのものづくり体験。
思い思いの一足を仕上げようと、親子で夢中になる
姿にあふれ、終日賑わいました。



3日間限定コラボフレーバー

人気店のアイスに加え、『KIKI NATURAL
ICECREAM × ふたこビール』のスペシャルフレーバー
も登場！暑さを忘れるひんやりとしたクラフトアイスは、
多くの人に楽しまれました。

CRAFT ICE
CREAM BAR



音楽トリオ『KAMOSU』LIVE

民謡や世界のリズムを現代的に響かせるライブに、会場みんなで
手拍子をしながら歌い踊る時間に。世代を超えて盛り上がりました！



2026年9月19日(土)～21日(月・祝)

11:00-17:00



詳細はWeb

二子玉川ライズ 中央広場 [入場無料]

※一部コンテンツは有料です

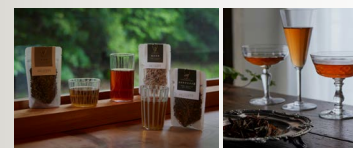
TEA PARTY

MARKET

BOOK FAIR

自由に集うお茶会で、
茶葉をひらく

まるで公園でくつろぐような、開放的な
お茶会エリアが登場！ほっと一息つきながら、
お茶にまつわる時間を楽しんで。



お茶と季節の
マーケットで、心をひらく

お茶に合うお菓子、うつわや道具、季節の
植物を感じるアイテムまでずらり出店！お茶の
時間をより豊かにしてくれるマーケットです。



つくり手の想いに触れる、
本をひらく

出版社や個人の本づくりから、古書、ZINEまで、
さまざまな本が勢ぞろい！さらに本の交換会も開催！
お家で眠っている本を誰かの一冊と交換してみませんか？



2027年2月にも15周年を締めくくるイベント開催予定！まちのだれもが楽しめる場をつくります！



発行 元:ニ子玉川ライズ/SETAGAYA REPUBLIC FES実行委員会

企画・制作:三茶ワークカンパニー株式会社/六歩株式会社

編集 集:西小路舞姫(saicorom Inc.)

執筆・編集協力:倉本潤

撮影:伊達直人

デザイン・イラスト:CHACO

2026年9月14日発行

※紙面の情報は2026年9月14日現在のものです。

※イベントの内容は変更・中止となる場合がございます。

